

世界に誇れる環境先進都市が目指す オーガニックビレッジ

令和5年9月15日（金）
亀岡市長 桂川 孝裕





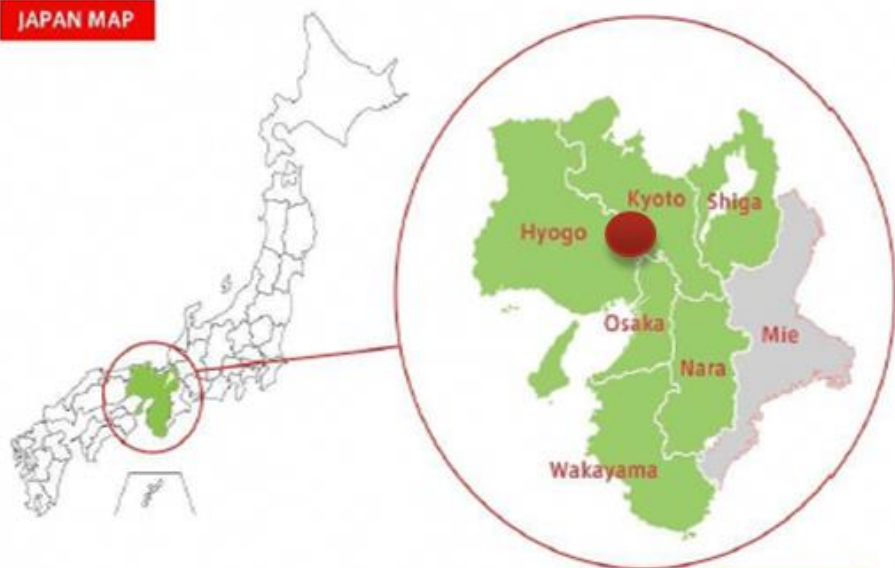
亀岡市の概要

これまでの取り組み

これからの取り組み

- ・ 京都市の西隣に位置
- ・ J R 京都駅から快速で21分、嵐山駅から8分
- ・ 高速道路網で大阪府・兵庫県と結ばれている
利便性の高い立地環境
- ・ 人口 86,851人 (2023.9.1時点)
- ・ 面積 224.8km²
- ・ 秋から春にかけて、霧に包まれる霧のまち

JAPAN MAP



KANSAI (関西地方)





湯の花温泉



保津川下り



嵯峨野観光鉄道
(トロッコ列車)

観光入込客数 **344万人** (令和元年)

うち三大観光が半分ほどを占める。

(湯の花温泉25万人、保津川下り24万人、トロッコ列車134万人)

明智光秀 (本能寺)、足利高氏 (倒幕旗揚) など、歴史の転換点に登場



サッカー
J1京都サンガの本拠地

サンガスタジアム
by KYOCERA

スタジアム内には
ボルダリングウォール
保育所・Eスポーツ
コワーキングスペース
などなど



木育広場
「KIRI no KO」
が4月に
オープン!

亀岡市の概要3 (農業)

古くから京都の穀倉地帯、 京の台所として知られる

現在も京料理に欠かせない 京野菜の一大生産地

京亀岡野菜

れ、米、麦、炭などの特産品も運ばれるようになりまし。古くから京の都に新鮮な食材を提供し、今なお府内有数の穀倉地帯として高い生産力を誇る亀岡は、京野菜の産地、京の「台所」として知られています。

京の奥座敷、一歩足をのびたら、ほっとする、があるまち亀岡。

全国に名高い、亀岡の保津川下り。もともと、豊富で良質な丹波の木材を筏で京都・大阪に運ぶ、輸送路としての役割を担っていました。17世紀初頭には京都の豪商、角倉了以によって水路が開か

京みず菜
葉に深い切れ込みがあるのが特徴。江戸時代の書物「徳州奇譚」に東きや丸糸廻りて栽培されていた記録があります。京都のみず菜は干筋京みず菜ともいわれ、葉柄が繊細で白く、葉の緑とのコントラストが美しい野菜。

0.3

丹波大納言小豆
つがが大きく色艶がよく独特の香りがあるのが「京都大納言小豆」。亀岡盆地は気象や土壌に恵まれ、古くから高品質の小豆を生み出す産地となってきました。京都大納言小豆は、味、品質、大ききとも日本一です。

賀茂なす
「一番土、二鷹、三茄子」。茄子は昔から縁起の良いものとされてきました。「なすの女王」ともいえる風情と味わいを持つ京の産品。風が吹いて葉っぱが実に触れるだけで傳が行いてしまうくらいデリケートな野菜です。

61.4

小松菜
江戸時代に小松川村（現在の東京都江戸川区）に在り、徳川頼房が陣村の甚悪菜を改良したものとされています。亀岡では昭和60年頃から栽培者が増加し、京阪神の市場で「亀岡の小松菜」と指定商を確保できるようになりました。

100

聖護院かぶ
大きく風流のある形をした聖護院かぶ。原産地「千枚漬坊」の材料として有名です。産地である亀岡市篠町は市内でも特に産物の多い地域で、朝霧の露がおいしい聖護院かぶを作る」といわれています。

13.5

丹波くり
粟といえは丹波くり。日本一の粟の代名詞のようにいわれ、京都の秋を代表する味覚です。丹波くりは品種ではなく、農家の努力と丹波の風土、気象条件が生み出した京の産品です。

やまのいも
「つくねいも」といわれる「やまのいも」。肉質が締まり、水分が少なく粘りが大変強いのが特徴。まりおろしてとろろ汁、京都では饂飩などお菓子の材料としても重宝されてきた食材です。

12.9

京たけのこ
春の訪れを知らせるたけのこ。えぐみがなく、軟らかく旨味がある日本一の誉れ高い京たけのこは、栽培農家のたけのこ産管理から生まれます。施肥、土入れ、親竹の隠伐など、すべて農家の手作業で行われます。

9.5

祝(酒米)・京の酒
京都で品種育成し、限定栽培されている酒造好適米「祝」。豊かな京都の土と水で育まれ、京都の歳元が高く評した酒米です。

9条ねぎ
葉の内部のぬめりがねぎ本来の甘味と軟らかさの秘密。京都でのねぎ栽培の歴史は古く、約1500年前の和銅時代に導入されたとの記録があります。9条ねぎをたっぷり入れた味噌汁は、風邪の妙薬ともいわれてきました。

8.7

紫ずきん
日本一の品質を誇る「丹波黒大豆」から生まれた枝豆。豆の薄皮が薄茶色をしていることや、豆の形が頭巾に似ていることから名付けられました。粒が大きくコクがあって抜群においしい秋の枝豆。

6.6

えびいも
里芋の一種。安永年間(1772~81)、現在の「いもぼう」の祖先、平野権大夫が、善徳院堂が長崎から持ち帰った里芋の種を土入れして丁寧に育てているうち、皮に縮がった大きなえびのような形の芋が採れるようになり「えびいも」と名付けられたとか。

29.6

聖護院だいこん
大きくおい聖護院だいこんは、元は長大根だったとか。180年代前半、尾張の国から運来された大根を京都の篤農家が聖護院廻りに栽培するうちに丸い大根になりました。煮崩れが少なく、

花菜
冬の切り花として栽培されていましたが、いつしか福地や花畑みずりて食用にしたもの。心持ちよい食感と独特の辛味をもち、心を満たしてくれる香なりでの食材です。

京夏ずきん
丹波黒大豆から生まれた限定の枝豆。粒が大きくコクがあり、甘味がたっぷり。もちもちした食感が楽しめます。豆ご飯やかき揚げなどにしてもおいしいです。

新丹波黒
大粒でシワがなく、煮炊きしても形崩れしないのが特徴。夏の夏夜の温度差と秋の露が黒豆を大きくゆっくり熟成させているのではないかともし、トマトの産地です。

トマト
酸味と甘味のバランスが良くフルーツのような味わい。果肉と肉味がジューシーと誇まっています。亀岡は30年以上続くトマトの産地です。



1 農業経営体 1,487（うち法人30）

【特徴】 0.5～1.0haの耕地面積 694（47%）

販売金額50万円未満 684（46%）

販売実績のある経営体の84%は稲作が売上1位

2 経営耕地面積 1,641ha

【特徴】 1経営体あたり1.1ha（田 1,509ha、畑121ha）

3 販売目的の作付面積（主なもの）と経営体数

●水稲（食用）1,106ha 1,263、●小豆57ha 125、●ねぎ（露地）38ha 96

●大豆11ha 82、●小麦9ha 14、●大根（露地）7.6ha 122 など

4 販売金額1位の出荷先

農協 57%、消費者に直接販売16%、農協以外の集出荷団体10%

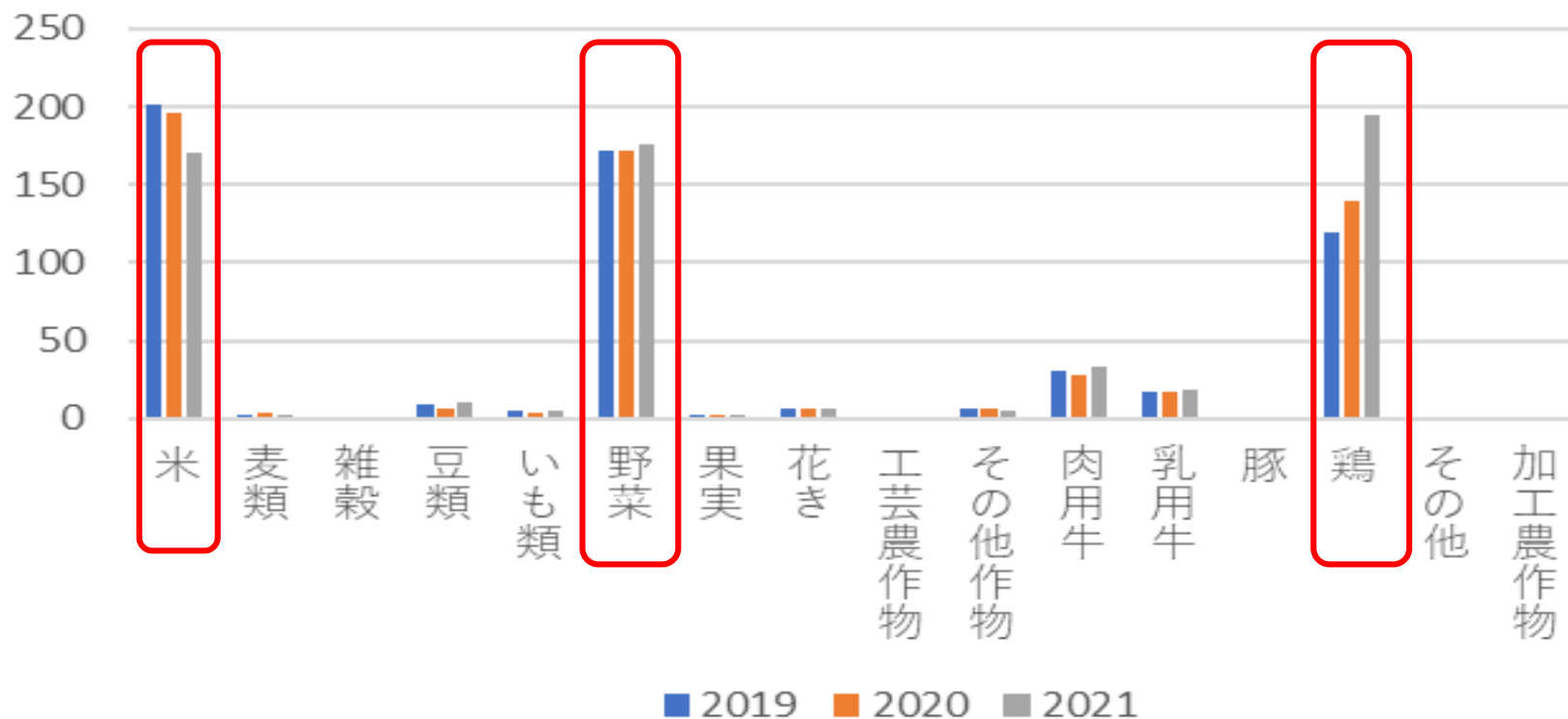
5 有機農業に取り組んでいる経営体と作付面積

105/1,487（7%）、7.6/1,528.1ha（5%）

- 亀岡市の農業産出額は
2019年(57億円)、2020年(58億円)、2021年(62億円)
- これまでは、**米、野菜**が多かったが、**鶏**の伸びが大きい。

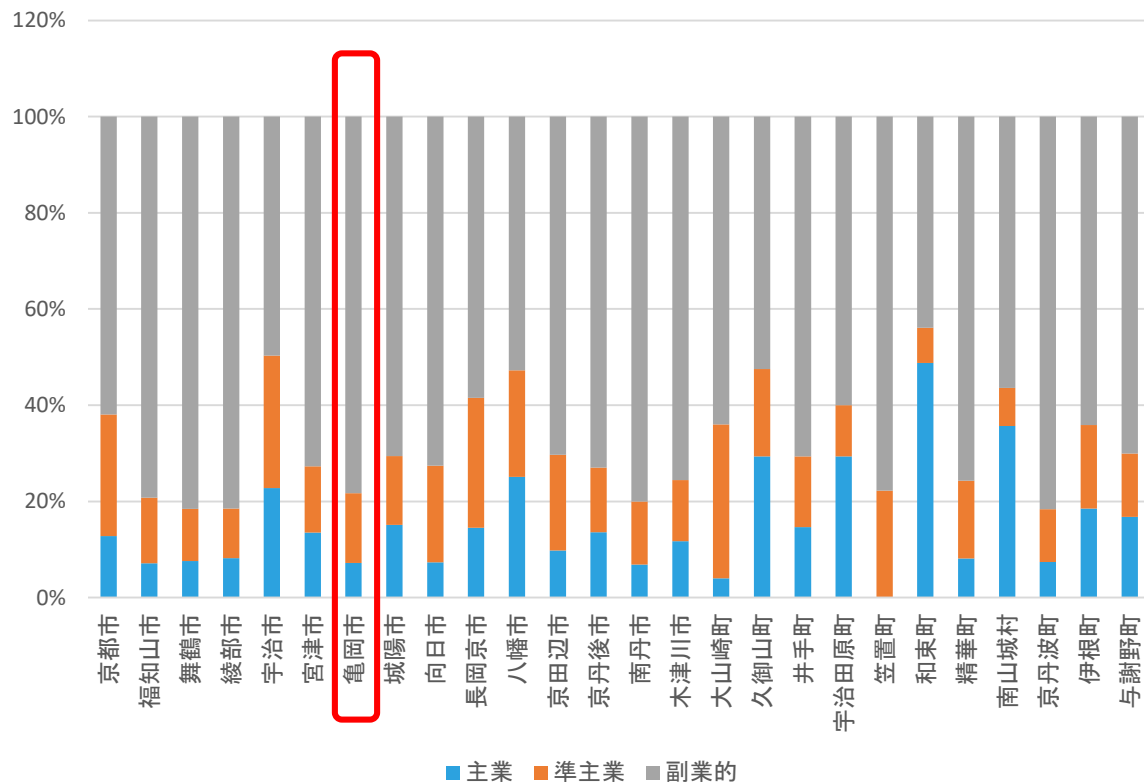
亀岡市における部門別の農業産出額（2019～2021年）

(千万円)



■ 農業経営体（個人経営体）における副業的農家の割合は、**78%**。

京都府内市町村の主副業農家の割合（2020年）



●主業農家

農業所得が主（農家所得の50%以上が農業所得）で、1年間に60日以上自営農業に従事している65歳未満の世帯員がいる農家をいう。

●準主業農家

農外所得が主（農家所得の50%未満が農業所得）で、1年間に60日以上自営農業に従事している65歳未満の世帯員がいる農家をいう。

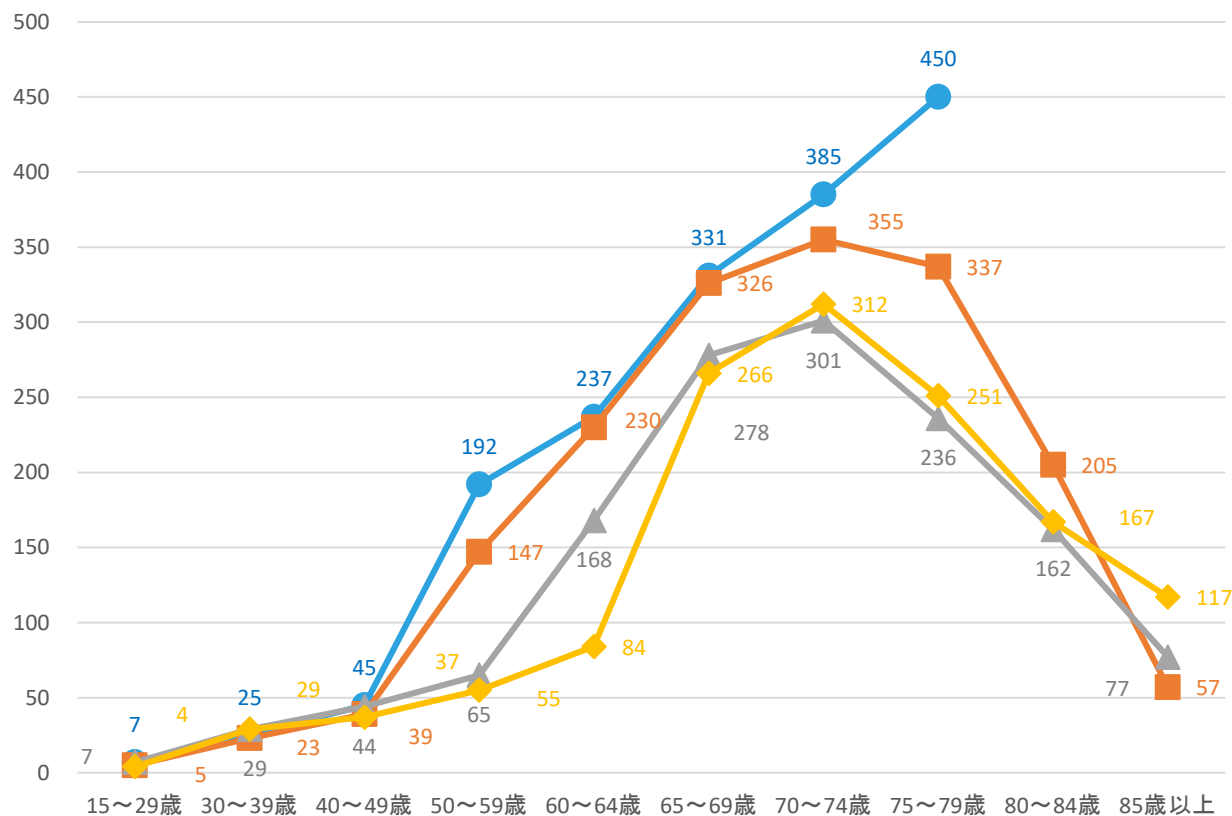
●副業的農家

1年間に60日以上自営農業に従事している65歳未満の世帯員がいない農家（主業農家および準主業農家以外の農家）をいう

（出典） 2020年農林業センサスをもとに算出。

- 2020年から2030年の10年間で**47.5%**の従事者がリタイアの可能性あり。
- 農業の担い手不足が深刻な領域に入りつつある。

亀岡市の年齢別基幹的農業従事者数（個人経営体）



2020年 → 2030年
 70～74歳 ▲50%
 75～79歳 ▲75%
 80歳以上 ▲100%
 と仮定して積算

2020年 1,322人中
 2030年 628人
 リタイア

亀岡市の概要



これまでの取り組み

これからの取り組み



2004年	保津川下りの船頭 さんによる清掃活動が始まる
2007年	保津川の環境保全に取り組む NPO法人プロジェクト保津川 が誕生(法人設立は2008年)
2012年	内陸部の自治体初 海ごみサミット2012亀岡保津川会議 開催
2015年	環境先進都市を目指すビジョン を示す
2018年	亀岡プラスチックごみゼロ宣言
2021年	亀岡市プラスチック製レジ袋提供禁止に関する条例 施行



環境に配慮した飲食店などを
「リバーフレンドリーレストラン」
として認定

使い捨て文化を見直すため、
容器持参のお買い物も少しずつ

次世代を担う子どもたちへの
環境教育



秋から春にかけて亀岡を包む「霧」を象徴として捉え、たくましい「野良」の芸術を育てることを目的とした芸術祭。「野良」とは有機的連関つまりオーガニックであるということという認識に立ち、農家との連携事業も展開。



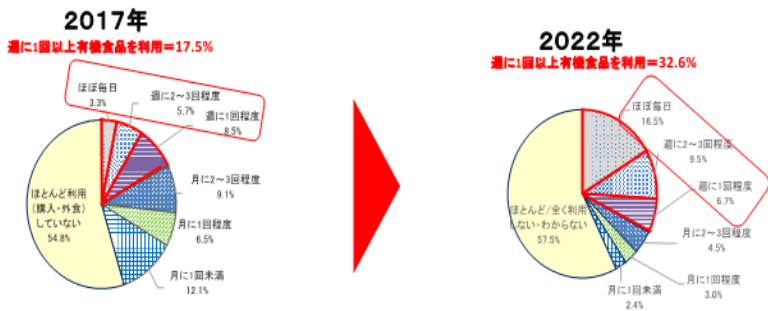
これからに向けての方向性

有機農業の市場は急速に拡大中。

推計年度	2009年	2017年	2022年
日本全国の有機食品市場規模の推計値(円)	1,300億円	1,850億円	2,240億円

※2009年は、IFOAM ジャパン/オーガニックマーケットリサーチプロジェクトによる推計を、2017年は、農林水産省「有機食品マーケットに関する調査」による推計、2022年は、農林水産省「有機食品市場規模及び有機農業取組面納の推計手法検討プロジェクト」による推計を基に、農業環境対策課作成

消費者アンケート調査の結果

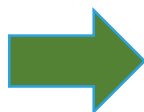


(出典) 農林水産省有機農業説明資料

天然記念物**アユモドキ**の保全
 生物多様性の維持
 脱炭素・脱プラ



農業の担い手確保
 農産物の高付加価値化
 農業由来の環境負荷低減



有機農業を希望する就農希望者増加。 新規就農74名中24名が有機農業実践

新規参入者における有機農業等への取組状況 (R3年度)

▼新規参入者のうち有機農業を実施する者の割合

	全作物で有機農業を実施	一部作物で有機農業を実施
平成22年	20.7%	5.9%
平成25年	23.2%	5.7%
平成28年	20.8%	5.9%
令和3年	16.9%	5.9%

*新規参入者とは、土地や資金を独自に調達(相続・贈与等を除く)し、新たに農業経営を開始した経営の責任者及び共同経営者

※新規就農者の就農実態に関する調査(H22, H25, H28, R3 全国農業会議所 全国新規就農相談センター)に基づき農業環境対策課作成。本調査の調査対象は就農から概ね10年以内の新規参入者。

亀岡市として
 有機農業の推進を加速化

亀岡市の有機農業への取り組みはまだ始まったばかり。これまでに取り組んだこと



生産者への補助制度の創設

- 有機 J A S 認証取得支援
 - （3年間 補助率：1年目7/10、2年目6/10、3年目5/10）
- 土壌診断補助
- 給食での有機米・野菜購入に対する差額支援



保育所・学校給食への有機野菜・米導入

- 自然保育を実施する市立保育所・こども園4園に月1回野菜提供
- 2022年7月に市立保育所・こども園全園で有機野菜提供
- 2022年6月から保津小学校で試験的に有機米提供開始（年74回）
- 2022年12月から市立保育所・こども園に有機米提供開始（月1回）



オーガニックを進める団体との連携

- 亀岡オーガニックアクション（有機米栽培）
- 自然派京都有機農業推進協議会（研修会開催など）
- かめまる有機給食協議会（有機野菜提供・マルシェ）



亀岡市の概要

これまでの取り組み



これからの取り組み

みどりの食料システム戦略（概要）

～食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現～
Measures for achievement of Decarbonization and Resilience with Innovation (MeaDRI)

令和3年5月
農林水産省

現状と今後の課題

- 生産者の減少・高齢化、地域コミュニティの衰退
- 温暖化、大規模自然災害
- コロナを契機としたサプライチェーン混乱、内食拡大
- SDGsや環境への対応強化
- 国際ルールメイキングへの参画

「Farm to Fork戦略」(20.5)
2030年までに化学農薬の使用及びリスクを50%減、有機農業を25%に拡大

「農業イノベーションアジェンダ」(20.2)
2050年までに農業生産量40%増加と環境フットプリント半減

農林水産業や地域の将来も見据えた持続可能な食料システムの構築が急務

持続可能な食料システムの構築に向け、「みどりの食料システム戦略」を策定し、中長期的な観点から、調達、生産、加工・流通、消費の各段階の取組とカーボンニュートラル等の環境負荷軽減のイノベーションを推進

目指す姿と取組方向

2050年までに目指す姿

- 農林水産業のCO2ゼロエミッション化の実現
- 低リスク農業への転換、総合的な病害虫管理体系の確立・普及に加え、ネオニコチノイド系を含む従来の殺虫剤に代わる新規農薬等の開発により化学農薬の使用量（リスク換算）を50%低減
- **輸入原料や化石燃料を原料とした化学肥料の使用量を30%低減**
- **耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合を25%(100万ha)に拡大**
- **2030年までに食品製造業の労働生産性を最低2割向上**
- 2030年までに食品企業における持続可能性に配慮した輸入原材料調達の実現を目指す
- エリートツリー等を林業用苗木の9割以上に拡大
- ニホンウナギ、クロマグロ等の養殖において人工種苗比率100%を実現



ゼロエミッション
持続的發展

革新的技術・生産体系の
速やかな社会実装

革新的技術・生産体系
を順次開発
→
つつある
技術の社会実装

取組
・
技術

2020年 2030年 2040年 2050年

戦略的な取組方向

2040年までに革新的な技術・生産体系を順次開発（技術開発目標）
2050年までに革新的な技術・生産体系の開発を踏まえ、今後、「政策手法のグリーン化」を推進し、その社会実装を実現（社会実装目標）

- ※政策手法のグリーン化：2030年までに施策の支援対象を持続可能な食料・農林水産業を行う者に集中。
2040年までに技術開発の状況を踏まえつつ、補助事業についてカーボンニュートラルに対応することを目指す。
補助金拡充、環境負荷軽減メニューの充実とセットでクロスコンプライアンス要件を充実。
- ※革新的技術・生産体系の社会実装や、持続可能な取組を後押しする観点から、その時点において必要な規制を見直し、地産地消型エネルギーシステムの構築に向けて必要な規制を見直し。

期待される効果

経済 持続的な産業基盤の構築

- ・輸入から国内生産への転換（肥料・飼料・原料調達）
- ・国産品の評価向上による輸出拡大
- ・新技術を活かした多様な働き方、生産者のすそ野の拡大

社会 国民の豊かな食生活
地域の雇用・所得増大

- ・生産者・消費者が連携した健康的な日本型食生活
- ・地域資源を活かした地域経済循環
- ・多様な人々が共生する地域社会

環境 将来にわたり安心して暮らせる地球環境の継承

- ・環境と調和した食料・農林水産業
- ・化石燃料からの切替によるカーボンニュートラルへの貢献
- ・化学農薬・化学肥料の抑制によるコスト低減

アジアモンスーン地域の持続的な食料システムのモデルとして打ち出し、国際ルールメイキングに参画（国連食料システムサミット（2021年9月）など）

地産地消・給食への展開拡大

- 有機給食の推進組織の設立
- 学校給食への有機米導入拡大
- 給食への導入品目を重点的に生産拡大

有機農業の学校（育成プログラム）

- 有機農業を学ぶ学校の検討・決定、運営
- プログラム修了者の伴走支援
- 交流イベントの開催

独自認証制度

- 亀岡市独自認証制度の検討

市民参加と京都・亀岡保津川公園

- 有機農業の拠点としてオーガニックビレッジパークの整備
- 2026（令和8）年の全国都市緑化フェア（誘致中）に合わせての開園検討中

オーガニックビレッジ宣言 （2023/2/12）

亀岡市



亀岡市長 杜川 孝裕

亀岡市は、古くから「京の台所」として、また、現在でも京野菜の主要産地として、京都の農業において大きな位置を占めています。

また、全国初のプラスチック製レジ袋提供禁止条例を制定し、「世界に誇れる環境先進都市」の実現に向けた取り組みを進めています。

持続可能な食と農を生産から消費までの食料システム全体で進めていくために、本市の特徴を活かした取り組みを積極的に進めていく必要があります。

本市は、給食へのお米を始めとする有機農産物の導入や生産者の育成など、有機農業を推進することで、次代を担う子どもたちに豊かな自然と食、農を引継ぐために、ここに「オーガニックビレッジ」を宣言します。

令和5年2月12日

亀岡市長

杜川 孝裕



子どもファースト宣言
KODOMO FIRST DECLARATION

子どもの未来は、わがまちの未来
子どもの未来は、日本の未来
子どもを応援することが持続可能な輝かしい世界につながる

「すべての子どもたちが光り輝く 笑顔あふれるまち」
一人より二人、二人より三人、より多くの子どもたちが健やかに成長し
子どもたちの笑顔があふれるまちを目指します。

子どもを本気で応援するまちへ「子どもファースト」を宣言します
子どもに優しいまちづくりに取り組みます
子どもを応援するまちづくりに取り組みます
子育てに優しいまちづくりに取り組みます

令和4年8月22日
亀岡市長 桂川 孝裕

子どもファースト事業 所得制限なし

- 01 小児医療費18歳まで拡大と無料化
- 02 保育料第2子以降全て無料化
- 03 保育園・幼稚園・こども園でおむつの提供、処理の無料化
- 04 放課後児童会の一家庭2人目以降無料化、平日午後7時まで延長、土・日曜日の実施

亀岡市 KAMEOKA CITY

子どもに優しいまち

- ・ 小学校オーガニック米給食の実施と食育体験
- ・ 不育誕生祝い品プレゼント
- ・ 中学校給食の早期実施
- ・ 小中高等学校での生理用品無償配布
- ・ 小中高等学校に給水サーバーの設置とマイボトル普及
- ・ 自然保育（森のこども園）の充実

・ 小学校給食に必要なお米の量
約60トン/年

・ 【収量】

R3 0.2トン → R4 1.6トン
→ R5 20トン（見込み）

・ 食育活動の充実



1 販売先の拡大

- ・流通網の構築
- ・市内飲食店での有機野菜使用メニュー採用
- ・市内外での有機農産物PRの充実



2 市内直売所や朝市等での販売の充実

- ・市内直売所（約20ヶ所）等での有機野菜コーナー設置
- ・オーガニックファーマーズマーケット開催

3 オーガニック市場やインバウンドの傾向などに関する勉強会等の開催



1 有機農業を学びたい人へのサポート

- ・ 有機農業者の学校（育成プログラム）開始
※2023年度中の開講に向けて準備中
- ・ 有機JAS研修会・栽培講習会の開催

2 就農へのハードルの引き下げ

- ・ 農機シェアリングサービスの拡充
- ・ 農機購入補助（市独自）の継続

3 有機農業参入のハードルの引き下げ

- ・ 有機JAS認証取得支援等の補助制度の継続・充実

4 資機材の調達等

- ・ 市営土づくりセンターのたい肥改善
- ・ 剪定枝・落ち葉等を活用したたい肥
- ・ 生分解性マルチ等の脱プラスチック化促進



亀岡駅北側の京都・亀岡保津川公園（約14ha）を有機農業の拠点に。
令和8（2026）年の全国都市緑化フェアの誘致中。

フェアの会場として会期に合わせてオープンを検討。



【活用（案）】

- ① 有機農業に親んでもらうための貸農園・市民農園・農業塾
- ② 実証実験の場
- ③ 有機農業関連イベント開催
- ④ 新規就農者向け有機農業学校



【お問い合わせ先】

亀岡市産業観光部農林振興課
有機・食農推進係

〒621-8501

京都府亀岡市安町野々神 8

TEL : 0771-25-5036 (直通)

FAX : 0771-25-4400

MAIL : keizai-soumu@city.kameoka.lg.jp